

学校経営方針(中期経営目標)	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点(短期経営目標)
<p>京都府立盲学校創立150周年(令和10年度)に向けて、時代のニーズに応じた学校づくりを第2期5カ年計画として目指す。(5年目)</p> <p>1 自立と社会参加を目指した教育活動の推進 【重点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習の基盤となる言語活動の充実 ・生涯スポーツにつながる基礎体力の強化 ・職業教育の充実 ・視覚障害を伴う重複障害教育の充実 ・自立活動を中心とした研究活動の推進と校外への発信 ・早期教育(幼稚部)の強化 <p>2 視覚障害教育におけるインクルーシブ教育システムの推進</p> <ul style="list-style-type: none"> ・盲学校を中核とする「連続した多様な学びの場」(幼・小・中・高・特支)との交流及び共同学習等の推進 ・視覚支援センター及び南部視覚・聴覚支援センターの相談機能(就学前、入学、進路等)の強化 <p>3 共生社会の実現を目指した地域・関係諸機関との連携推進</p> <p>4 人権尊重と安心安全な教育環境を基盤とした学校づくり</p> <p>5 「働き方改革」を踏まえた学校運営</p> <p>6 「京都盲啞院関係資料(重要文化財)」の管理・保存と活用</p> <ul style="list-style-type: none"> ・京都府立聾学校と連携した150周年記念資料集の編纂及び記念行事の検討 	<p><成果></p> <ul style="list-style-type: none"> ・他府県の視覚支援学校、近隣の総合支援学校との交流をはじめ、居住地校との交流も積極的に展開でき、集団での学びが充実した。 ・ホームページを活用して学部の取組や様子等を積極的に発信できた。 ・京都府南部視覚・聴覚支援センターの設置により、地域支援センターとして京都府全域を支援する体制はより一層充実した。 ・個々の生徒に応じた進路先開拓、関係機関との連携強化、各学部段階での適切な情報提供により、進路指導の充実に努めた。 ・両校地の児童生徒の実態に合わせて、関係機関と連携し、避難訓練や防犯訓練を実施すると共に、教室にヘルメットと防災袋を置くなど、学校安全の取組が進んだ。 ・150周年記念資料集の編纂及び、京都府立聾学校と連携した記念行事の検討について年度目標どおりに準備を進めることができた。 ・保護者配信アプリの導入により、効率的な情報のやり取りができた他、校内のタブレット端末の配備充実により、ペーパーレス化を図った。 <p><課題></p> <ul style="list-style-type: none"> ・ICT教育力のスキルアップと授業での活用 ・言語活動を中心に据えた教育活動の一層の推進 ・関係機関との連携による進路指導・キャリア教育の充実 ・自立活動を中心とした教育実践の整理と発信 ・個々の視覚障害幼児児童生徒の状況に応じた地域支援の充実 ・専門性向上のための研究研修の一層の推進 	<p>1 学習指導要領の趣旨を踏まえた、各学部における授業改善</p> <p>2 児童生徒数の推移を踏まえた教育活動の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・教育活動(行事や授業等)における学部間で連携した学習集団の確保 ・学部・学科・学級の実情に応じた交流及び共同学習の発展 <p>3 スポーツ、文化活動の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・将来の豊かな生活に繋がる各種大会等への積極的参加 <p>4 キャリア発達と希望進路実現に向けた指導・支援の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・キャリア発達を踏まえた教育課程の編成(体験学習、実習等) ・社会のニーズを踏まえつつ生徒の実態に適した職場開拓 ・卒業後の進学・就労等に関する事例の整理、活用 <p>5 ICT教育の充実</p> <ul style="list-style-type: none"> ・DX研修の学びを生かしたICT機器を活用した授業実践 ・タブレット端末等ICT機器や視覚支援機器、点字使用者の情報機器等の活用の向上と生涯に渡る学習基盤づくり <p>6 視覚支援センター及び南部視覚・聴覚支援センターの機能強化と校内外の支援力強化</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地域関係者・保護者との連携による切れ目なく繋げる地域支援の充実 <p>7 安心安全な教育環境の保障</p> <ul style="list-style-type: none"> ・防災・防犯対策の一層の充実 ・人権尊重を重んじた教育活動の一層の推進 <p>8 視覚障害教育の専門性及び指導力向上</p> <ul style="list-style-type: none"> ・研修の工夫と充実 ・免許(視覚障害領域)取得の推進 <p>9 教育活動や学校の取組に関する広報の工夫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・各学部、担当部署からの定期的な情報発信と、ホームページの積極的な活用 <p>10 「働き方改革」を踏まえた組織運営</p> <ul style="list-style-type: none"> ・分掌・専門会議業務の点検と見直し

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
教育活動全般	<ul style="list-style-type: none"> ・視覚障害教育の専門性と指導力の向上 ・児童生徒の教育的ニーズの把握、教育内容の明確化と指導方法の工夫 ・学びの連続性を重視した小中高連携 ・職業自立を目指し、キャリア教育の視点に立った進路指導の充実 	<p>【小中学部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校教育方針に基づき、児童生徒一人一人の教育内容の明確化と指導方法の工夫を行い、個に応じた指導の充実を図る。 ・学びの連続性を重視した小中高連携をもとに、自主的学習態度と課題解決能力を育成する。 ・キャリア教育をとおして、社会の中で自分の役割を果たしながら、自分らしくたくましく豊かに生きる力を育成する。 ・安心安全な学習環境作りに向けた取組を推進する。 ・日常的な保護者との連携に取り組み、活動の発信の充実を図る。 	<p>B</p> <p>B</p> <p>B</p> <p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・児童生徒それぞれの課題について、視覚的アプローチや自立活動の視点から教員間で情報を共有すると共に、学部内で定期的に協議を行い、指導方法を検討・実践した。 ・高等部との連携は十分に図れず、学びの連続性という観点では改善の余地が見られた。 ・地域との連携や交流活動を中心に、多様な体験をとおして学ぶ機会を多く設けたことで、児童生徒の課題解決能力や主体的に学ぶ姿勢を育成することができた。 ・教員を対象に防災に関する研修を実施し、緊急時に備える体制を整えた。また、児童生徒にも授業や避難訓練をとおして防災への意識付けを図った。 ・保護者との懇談をとおして児童生徒の様子を共有するとともに、ホームページや通信等を活用して情報発信を行い、学校の取組を継続的に共有した。
		<p>【高等部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学部間連携によるタテの繋がりを基盤とし、教職員が互いに学び合い、指導上の課題解決や専門性の向上に努める。 ・授業や交流及び共同学習等におけるICT機器の利活用を進める。 ・外部機関と連携した体験、実習等を取り入れ、キャリア発達を促すとともに、教育活動の充実を図る。 	<p>B</p> <p>A</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・中高合同の体育や作業学習、学期ごとの各教科会議によりタテの繋がりの基盤を構築し、専門性の向上等に努めた。 ・教材閲覧アプリ、ビデオ通話及び授業支援クラウドサービス等によるICT機器の利活用を進めた。 ・当事者による生命のがん教育や助産師によるいのちの大切さと性教育、施設及び職場実習等をとおして、いのちの尊さや他者との関わり方等のキャリア発達を促す教育活動を行った。
		<p>【寄宿舍部】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・舎生の基本的生活習慣の確立を支援し、健康や安全に関する報告や共有等、速やかな対応に努める。 ・各学部、視覚支援センターと連携して学校運営に参画する。 ・ホームページを活用し、タイムリーな情報発信を行う。(3回/月) 	<p>B</p> <p>B</p> <p>A</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・舎生の心身の状況把握に努め、情報共有を図り、健康的な生活を送れるよう学部とも連携しつつ支援した。 ・学部・センターと連携して、行事に向けての施設利用や取組への協力依頼に対応した。 ・行事、日常生活での様子をホームページにおいて、タイムリーに発信した。

評価領域	重点目標	具体的方策	評価	成果と課題
教育活動 全般 2	<ul style="list-style-type: none"> ・計画的、継続的な学校支援と就学・進学等に伴うスムーズな移行支援 ・弱視学級担当者等、視覚障害教育に携わる関係者の支援力向上 ・関係諸機関との連携やセンター業務の案内・周知の強化 ・早期からの支援、切れ目ない支援の充実 	【視覚支援センター、南部視覚・聴覚支援センター】 ・自立活動と個別の指導計画の活用を軸とした学校支援（伴走型支援）を実施する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・個別の指導計画等の活用による計画的・継続的な支援を進めた。校内巡回相談員の専門性を活用した教科指導や自立活動（自己理解・自己発信）支援を推進した。今後、効果ある支援を目指し、関係者間で子どもの教育的ニーズの精査と共有に一層努める。 ・オンデマンド講座（前・後期 計12本）、対面型研修会を組み合わせ、年間をとおして弱視教育に係る研修を提供し、地域校における支援充実を図った。 ・行政機関との連携が進み、保健師からの相談ケースや、市町教育委員会・学校との就学に向けたスムーズな支援連携が可能となるケースが増えている。 ・あおぞら教室を計画どおり7回開催し、視覚障害幼児・保護者と盲学校を繋げた。内容や開催方法等については、検討を進める。北部サテライト相談は1ケースのみであったが、北部地域で相談ができる場所として次年度も継続する。 ・医療や福祉機関との情報共有が進み、有効な支援提案に繋がった。今後、三者連絡会を更に充実させ、支援力の向上を図る機会となるよう検討したい。
		・弱視教育指導者研修会（オンデマンド型（年2回）、集合型（年1回））と視覚障害研修講座を開催する。	A	
		・教育局、市町教育委員会、保健センター等を訪問し、連携を強化すると共に、京都ロービジョンネットワーク相談員研修会（年3回）、京都府視覚相談会等に参加する。	B	
		・あおぞら教室（乳幼児親子教室・月1回程度）、北部サテライト相談（隔月）を開催する。	A	
		・医療機関等、関係機関との日常的な情報共有に基づく支援を提案する。	B	
組織運営	<ul style="list-style-type: none"> ・「働き方改革」を踏まえた組織運営 	・学部と校務分掌、及び両校地間の連携強化と確実な情報共有のための方法を工夫する。	B	<ul style="list-style-type: none"> ・本校の立地環境の中にあっても、校地、組織間の連携方法を工夫し情報共有に努めた。タブレット端末が広く行きわたり、アカウントを持つ者が増えたことで効率の良い情報共有ができた。引き続き、視覚障害のある教員や物理環境の整わない者への個別の情報共有を並行して取り組む必要がある。 ・代表部長会議をとおして、各分掌業務等の点検と見直し（行事の精選）を行い、業務改善につながる事務処理方法や運営方法について取組を共有した。大徳寺校地においては、時間外勤務の多い教職員が見られることから、学校全体での業務の平準化が望まれる。
		・分掌・専門会議業務の点検と見直しを図ると共に、ワークライフバランスのとれた安心安全な職場環境作りを牽引する。	B	

進路指導	<ul style="list-style-type: none"> キャリア発達と希望進路実現に向けた指導、支援の充実 小中学部から高等部までの系統的キャリア教育の推進 見学、実習、進路学習の充実 	<ul style="list-style-type: none"> 進路希望調査やキャリアパスポートにより児童生徒の進路希望を把握し、個に応じた進路指導を行い、長期的視点での進路選択・進路実現ができるように努める。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 進路希望調査やキャリアパスポートを活用し適宜面談の機会を設け、児童生徒及び保護者等の考えを聞き取り、必要な情報提供や助言をすることで進路について主体的に考える態度の育成を図った。 各学部段階における進路指導・キャリア教育を進めたが、連続性のある取組については十分ではない。 進路実現に向けて見学、実習を充実させた。一部についてはより一層の充実が望まれる。
		<ul style="list-style-type: none"> 小中学部から高等部までの連続性のある進路指導・キャリア教育を各学部段階において実施する。 	B	
		<ul style="list-style-type: none"> 見学や実習、進路学習等とおして、生徒の自己理解を促し、進路に対する関心や態度、自己発信力、職業観、勤労観等を育成する。 	B	
研究研修	<ul style="list-style-type: none"> 共通研究テーマ「視覚障害教育に関する専門性の継承・発展及び指導力、支援力の向上」 専門的かつ実践的な知識と技能の共有化 教職員の研究や研修に対する啓発と情報発信 150周年記念実践事例集の編集 	<ul style="list-style-type: none"> 共通研究テーマを踏まえた研修や年2回の視覚障害教育研究会（全校研）を実施する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 集合型として、新着任者研修（4回）、基本研修（1回）、専門研修（点字1回）、全校研（2回）を実施した。 点図作成等のOFF-JT形式の研修を実施したが、研修内容の充実とクラウドベースでの運用について課題が残った。 授業公開（年2回）、研究授業（各部1回）を実施した。より良い実施形態について検討が必要である。 新着任研の時期や内容の整理を図った。情報発信のより良い方法について今後も検討が必要である。視覚障害教育への理解等向上を目的とするたよりを配布した。 依頼と集約、校正データの完成まで、本年度の進捗目標を達成した。
		<ul style="list-style-type: none"> ICTの活用やOFF-JT形式による研修の充実を図る。 	B	
		<ul style="list-style-type: none"> 全校授業公開（2回）や研究仮説に基づく研究授業等（各部1回）を実施する。 	B	
		<ul style="list-style-type: none"> 校内研修等の形態、視覚障害教育に関わる情報発信の方法を検討すると共に、校内研修のまとめを作成し、配布する。 	B	
		<ul style="list-style-type: none"> 各学部段階で大切にしたい視覚障害教育の専門性を系統化し、原稿執筆の依頼、集約を行う。 	A	
生徒指導 ・ 安全教育	<ul style="list-style-type: none"> 学部及び寄宿舍との連携強化 問題事象等に対する、早期発見と組織的かつ計画的な対応 児童生徒の健康安全・防犯に関する意識の向上 	<ul style="list-style-type: none"> 学校全体で情報を共有し、校地間の繋がりを意識した取組を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 適宜情報を共有し、円滑な業務に繋げた。 「いじめ防止基本方針」に基づき、いじめ対策委員会を定期的開催した。適宜学部間の情報を共有し、未然防止を第一に早期発見、早期解消へ至る一連の対応を行った。 新入生はオリエンテーション、在校生は各担任より周知した。 各校地で学校安全点検を実施し、その結果を基に学校環境の改善に継続的に努めた。
		<ul style="list-style-type: none"> 「いじめ防止基本方針」に基づき、きめ細やかな指導を推進する。未然防止を第一に、早期発見、早期解消へ至る一連の対応を徹底する。 	B	
		<ul style="list-style-type: none"> 安心安全な学校生活を送るために必要なルールやマナーの徹底を図る。 	B	
		<ul style="list-style-type: none"> 校内の施設・設備等、学習環境の改善に努める。 	A	

		<ul style="list-style-type: none"> ・学校関係者や家庭と連携し、児童生徒に健康の大切さや維持増進するための方法について理解を促し、適切な生活習慣や食習慣が実践できる力を育む。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・学校医の検診や健康観察、神経科相談、カウンセラーの活用、校内環境衛生の整備、保健室対応をとおして、児童生徒の心身の健康状態を把握し、ケアを行った。「ほけんだより」や「ランチタイム」をとおした情報提供、日常的な保健指導により、健康的な生活習慣や食習慣及び感染症予防への理解を促した。また、各校地において薬物乱用防止教室を実施した。 ・全教職員へ参加を促し、救急法講習会、普通救命法講習会、校内緊急時対応訓練を実施した。 ・食物アレルギー対応委員会を中心に児童生徒の健康課題に配慮した給食を提供するとともに、全教職員を対象に食物アレルギーに係る研修会を実施した。
		<ul style="list-style-type: none"> ・各校地の特性を踏まえた避難訓練や防犯訓練、緊急時対応訓練（AEDの使用法を含む）を計画的に実施する。 	A	
		<ul style="list-style-type: none"> ・食物アレルギー対応委員会を中心に安心安全な給食の提供について努めると共に、食物アレルギーに係る研修等を計画的に実施する。 	B	
I C T 教 育 ・ 情報管理	<ul style="list-style-type: none"> ・ I C T教育力のスキルアップと授業での活用推進 ・ 定期的な校内環境の保守管理及びセキュリティインシデント対策の徹底 	<ul style="list-style-type: none"> ・「学校DX研修」をとおして、I C T教育のスキルアップを図る。また、研修で取得した内容を活かした授業づくりができるようサポートを行い、I C T利活用を推進する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・ I C Tに苦手意識のある指導者が、学校DX研修をとおして経験を積み、授業の中で活用することが増えてきている。 ・ 各教科や自立活動等の時間をとおして、主にPCやタブレット端末等のスキル習得に向けて支援した。 ・ 各学部において、オンラインを活用して他府県の盲学校の児童生徒と定期的に交流学习を行った。また、国語や道徳の授業では共同学習に取り組み、普段は一人で学習することが多い本校の児童生徒にとって貴重な機会となった。 ・ セキュリティに関しては、研修や学部会等で、具体例を用いて共通理解を図った。
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 視覚アセスメント表に基づき、I C T機器や視覚支援機器、点字使用者の情報機器等のスキルの習得を系統化する。 	B	
		<ul style="list-style-type: none"> ・ 各学部と連携し、他府県盲学校や府内の視覚支援学級との共同学習や交流のサポートを行う。 	A	
		<ul style="list-style-type: none"> ・ I C T教育を円滑に実施するため、校内環境の保守管理を行うとともに、教職員のセキュリティ意識の向上に努める。 	A	

<p>学校関係者 評価委員会 による評価</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・地域支援センターの取組報告から、研修の機会に地域で視覚障害教育に関わる教員が多く参加していることを知り、支援体制の底上げができていていると感じた。 ・地域で多くの視覚障害者が学んでいる現状は世の流れとして受け止めるが、理療が今後どのようなようになっていくのか憂いている。 ・京都市立の近隣の支援学校と販売や清掃などとおした交流活動により、体験的な取組の実践を地域の方々に知ってもらうことができている。 ・学校評価アンケートに現れた課題点が今後の改善点だと受け止め、結果を有効に活用いただきたい。 ・視覚障害のある子を持つ親として、支援について相談やアドバイスを受けられる最も身近な存在は教員である。教員が専門性を向上させるための研修について機会や内容を充実させ、積極的な姿勢で臨んでもらいたい。
<p>次年度に 向けた改善の 方向性</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・言語活動を中心に据えた教育活動の一層の推進 ・学部や学習グループの実態に応じた交流及び共同学習の発展 ・ICTを効果的に活用した授業力の向上 ・学部間の連携による進路指導・キャリア教育の充実 ・専門性向上のための研究研修の一層の推進 ・自立活動を中心とした教育実践の整理と発信 ・効果的な情報発信の工夫とセキュリティー面の強化 ・スポーツ・文化活動の一層の充実 ・業務内容の精選による本来業務の充実